

井深対談

“ 目覚時計 ” が鳴る

忘れられないドイツ人の一言

井深 6月の、あのミュージカル『胎児に対する親の責任について』今度はいつやるのかって、聞かれますよ。

それにしても、何のきっかけから、私を原案者としてのミュージカルをやることになったんですか。

稲垣 あれはやっぱり先生のご本をいただいて、お話をさせていただきましてね、その時から…。

井深 私は子供といっても、0歳以下ですよって話をしたら、「それいきましょう」ということになったんだけど、そのいきさつを…。

稲垣 何か1つの作品を作る時、突然生まれるということはないなというのを、つくづくこの頃思うんですね。ほんとにいるんなことがつながって、そこへ到達して…。ですから、次はどこへつながっていくのかなという、自分の中でも不安と期待があるんですけど…。とうとう『胎児に対する親の責任について』というところへきてしまったということを考えますと、12年前にミュージカル運動を始めたというところがやっぱりスタートになっているような気がするんですね。

もっとさかのぼりますと、私は玉川学園の小学校、中学校を出ましたものですから、その頃にやった玉川の劇というのがありまして、やっぱりそれが、今やっているものの源というか、そんな気がするんですね。

井深 玉川学園では、海外でもやりましたでしょ。

稲垣 ええ。私は海外にはちょうど時期的にまいれませんでしたけれども、国内は回りました。信濃、熱海あたりとか、東北にもまいりました、主に夏休みに。学校の講堂で、みんな枕を並べて寝ましてね。それから五右衛門風呂なんかがありましてね。変な板が浮いている。どうやって入るんだろうというのでね。みんな子供たちがぎゃーぎゃー言いながらね、楽しみながら。

井深 戦争中、戦争後。

稲垣 戦争後です、先生（笑い）

井深 五右衛門風呂なんて言うからさ。

しかし、小原国芳先生っていうのは偉い先生だったね。

稲垣ほんとに素敵な先生でした。みんな「おやじ、おやじ」って言っていました。

井深 私のことなんか知っておられるはずないと思う初期の頃ね、大変はげましてくださって、「しっかりやってください」と言われてね、私がやった会合はほとんど出てくださったで

すね。何もお返しができなかったんだけど。

玉川学園の出版部で出た木村久一さんという人の、『早教育と天才』という本、それこそ古い本ですよ、昭和初期頃出された。その本が今でも幼児早教育の基本になる。それを小原先生からぼっといただいた。

稲垣 ああ、そうでしたか。

そんなことで、私は玉川学園で今のお芝居のものようなものは、多分体の中に入ったんじゃないかなと思うんです。

そのあと、映画の世界である程度仕事やってまいりまして、そして今から12年前に、劇団結成。これもちょっとしたきっかけなんですけれども、ドイツの方から「日本は今はいいいけど、10年もたったらひどいことになるよ。子供に心と時間をかけていない。このままだと、日本は滅びるよ」と言われまして。

井深 私の『あと半分の教育』というのを読んだ？

稲垣 はい。

井深 あれは、それを憂えて書いたんですよ。

稲垣 はい。私は子供がいないものですから、いわば子育てをさぼっているわけですからね。長いこと映画とかテレビとか舞台とか、いろんな仕事はしていたんですけども、考えてみると、お子さんのために何かやりましたかと聞かれた時に、「はい」という答えができなかったのがとても恥ずかしかったんですね。それじゃ1回ぐらいは何かしようというのが、ミュージカル劇団のスタートです。

その時に世界の昔話の中からやりましょうと。それから、美しいもの、さわやかなもの、そして明るくって、楽しくって、歌があって、踊りがあるのがいいからというのが、ミュージカルを選んだそもそもの原因です。それは実は玉川学園のオペレッタが原点だったというのが、今になって分かるんですね。

劇団がスタートした時は、対象を幼稚園ぐらいか、小学生ぐらいという感じでしたんですね。やってみますとね、こちらが出すメッセージをととても素直に受けとめてくださるというのは、小学生よりも幼稚園児、幼稚園児よりも、幼稚園のお子さんと一緒に3つの方、2つの方が見えますね、そういう方のほうがもっと何かストレートに、そして深くメッセージを受けとめてくれている。私たちはそれまで作品を選ぶ時にも、例えばこれは子供には難しいだろうとかね、というふうな選び方をしたんですけど、とんでもない話だということに気づいた - 。

井深 そうなんです。何かを感じるという意味ではね、生まれてからよりも、胎児のほうがもっと高い位置にいるかもしれない。それからがたがたと落ちて、6歳過ぎたらもう…。感じる力というのは、0歳が1番上なんです。

それにはやっぱりミュージカルなんてというのは、そういう訴える力を非常に持っているんだろうと思うんですけどね。

稲垣 ただ、そのことは最初からは分からなかったんですよ。

12年かかって、ようやく、ああそういうものなんだというのが分かってきたんですけど…。やっぱり劇場というのは、1つの特別な空間なものですから、その空間の中で人間というのが、大人も子供も結び合う。

井深 絆ですね。

稲垣 ええ。絆もできますし、心を開けるということがとつてもあるんですね。今は暮らしの中で、お互いに心を開放して話をするチャンスというのが少ないような気がするんです。

ところが、劇場の中でお芝居を見たりしていると、閉ざしていたものが思わず知らず開いてしまう。その中から飛び出してくる声には、大人の私たちからみると、未来の方向みたいなのを、サゼッションしてくれる何かがある。子供たちがいろんなメッセージを出してくれているというのが、怖いほど分かってきたのが、3年か4年前なんです。

やっとそれが分かってきて、そこから、ほんとに大事なのはちっちゃい頃なんだ。3つとか、2つとか、1つ。もしかしたら、その前かもしれないなというを感じたのが、3年前なんですね。

能力に空洞をつくらない

井深 幼児開発協会で一生懸命今年からやっているのはどういうことかという、感ずるということ、大げさに言うとテレパシー、超能力的なものを引き出し、育てる。小さいほどその力が強いらしいんですね。

それはどういうことかと言いますと、私の仲のいい友達で、武道家なんですけどね、空手を始めとして、いろんなことをやって、それにあき足らなくて、健康法にもなるし、武術にもなるというのを考え出した人がいる。何か見ていると、くにやくにやしてね、ワカメ踊りと私は言っているんですけどね（笑い）。

稲垣 お名前は何とおっしゃるんですか。

井深 青木宏之さん。新体道の創始者。世界中にお弟子さんがいるんですけどね。その人は非常に“気”が強くてね。後ろから真剣で人が斬りつけてきても、いつでも大丈夫。後ろを向いたまま、ずっとそれをよけちゃって。見ていると切迫感は何にもないんですよ。ひゅーっとどいたところへ斬りつけてるみたいに見えてしょうがないんですけどね。

ある時私は、青木さんに、子供の“気”を一遍試したらと言ったんですよ。そしたら、すぐに新潟県の長岡の幼稚園で、3歳児、4歳児、5歳児で実験してみた。1時間だけ正座をして精神を統一するようなことを、分かりやすく教えてから、先生が新聞紙を丸めて、後ろからぱっと打ちかかるんですよ。それをどうよけるかという、そういう実験をしたんです。そうしたら、驚くべきことには、3歳児が100%、4歳児が88%、5歳児が68%。それが如実に出てきた。それで先生もびっくりしちゃった。これはひとつ子供のために精神統一的なことを、いろんな体操の中でやろうとって、去年1年がかりでそれを大体こしらえてくれてね、今年から実行に移しているところなんですがね。

そういうテレパシー的な能力でも、もう3、4、5と、がたがたとだめになるのね。

稲垣 その数字、怖いほどですね。

井深 怖いほど - これは単にそれだけのことじゃないと思うので。

稲垣 思い出しました。私ね、たしか『幼児開発』誌で読んだんだと思うんですけども、その先生のこと。いつも絶対にきちんとよけられるのに、ある時よけられずにぶつかったと。どうしてなのかと思ったら、その人がもし、そのまま自分にぶつからなかったらけがをしたと。あれ、とっても感動したんです。ただ自分の身を守るというんじゃないで、相手のことも考える。

もう素晴らしいなと思いましたね。自分の身で1つの力を分けて、相手を傷つけないようにするという、そこまで修行というか、できるのは素晴らしいと思いました。

それは集中力ですかしらね。何なんでしょうかね。結局は気ですけども。

井深 気は気よりしようがないですね。その説明がほしいのは大人の世界で。気配を感じずる能力、ぱっと感ずるといふ…。大人に説明するには、そう言ったほうがいいのかもしいかなですね。

子供の時からそういう気というものを出せるような訓練をもっと進めていけばね、元来は誰でも持っていることかもしれないですよ。たとえば犬なんかだつて、自分の飼い主のご機嫌がいいか悪いかなんていうのは分かりますからね。

稲垣 ええ。

井深 それが世の中にはいろんな情報が山ほどあるから、そういうものに埋もれて、本来持っている能力なのになくなっちゃっている。未開国で - 未開国という言葉を使うと怒られるかもしれないけど、自然の中で暮らしていると、そういうものが残るわけですね。

稲垣 私もこれはちょっと聞きかじりですから、よくは知らないんですけども、人間の脳には三層あって、1番下にヘビと同じような、大変本能的な脳があるんですけどね。その次に、猫の脳。この猫の脳というのは、いわゆる美とか芸術とかを感じとる。

それからもう1つ、いわゆる人間の知恵というか、人と競争してどうかこうとかという部分に関わる脳。今1番、教育教育といって耕しているのは、この脳なんだという説なんですよ。

そして、今1番上の人間の脳ばかり耕してしまうので、残された情動的な部分とか、本能的なものが空洞になってしまうわけですね、耕されないで。だから、近頃中学生やなんかいろいろ問題が出ていますね。その空洞があり過ぎちゃうから起こってくる問題ではなからうかというふうな。

井深 おもしろい考え方ですね。その真ん中で感じる美とか芸術が、ほんとうの美とか芸術につながらないで、知識ばかりの美とか芸術につながっちゃっているのが今の世の中じゃないんですかね。

稲垣 ええ。ですから、いずれにしても、お客様からいろんな反応をいただいた中で、やっぱり1番感度のいい、0歳であるとか、胎児であるとか、その辺からやらなければいけないん

だناと思っておりました。それが3年前に、じゃ何か胎児のミュージカルを作ろうではないかという話になりまして、それで先生とお目にかかって…。

井深 やっとスタートを切った(笑い)

稲垣 でも、作家の松木ひろし先生なども、それからが大変だったんです。作品にするまでに、どういう形がいいだろうかというので、いろいろプロットをたてて。ですから、松木先生はね、脚本を5~6本書いているわけですよ。もういろんなタイプのもの - そして結局、胎児、命というところに…。

井深 命ね、生命の尊厳ですね。

稲垣 ええ、生命。命というところに焦点を合わせようというところにやっと到達したわけですね。

最初に対談させていただいた時に日本人は評論家のように、あそこが良かったからこうだああだという言い方をするけれども、君たち役者は、ただ相手に、見た人が感動したと思えることをやればいいんだよと、先生に言われたんですよ。覚えていらっしゃいます？

井深 全くそうなんだ。感激というのはね。それも小さい子供のほうが純粋に、感激、訴えられますね。

大人になるほど評論家になっちゃってね。なるべく感激しまいと構えちゃうんだよね。

「ママ生んでくれて、ありがとう」

稲垣 いろんなご感想の中で、2つ、3つぐらいの方は、とにかく今でもテーマ曲の“赤ちゃんはダイヤモンド”を歌っていますとか、帰りにはもう一緒に歌って帰りましたとか…。ほんとうに深く入っちゃうんですね。そして長く。

それと、もう少し大きなお子さん、今1番問題にされている中学生、高校生というのが、実は1番感動をもって受けとめてくれたという気が、今回、私はとてもするんですの。

井深 ああ、そうですか。

稲垣 ええ。ちょっと私が言うのは恥ずかしいんですけどね、高校3年生のお嬢さんが見に来て、「ママね、稲垣さんという人は、世の中を澄んだ目で見ているのね」という言い方をしたというんです。私はほんとうに怖かったの。それはね、女主人公のヤスコは、世の中を澄んだ目で見ているという設定で人物をつくったわけですよ。だから、もちろん私も、それを演ずるわけですから、そこに焦点を合わせましたでしょう。そういう、こっちが意図していたことが、それもストレートにですよ、「澄んだ目で見ているのね」なんていう言葉で返ってくるとは思いませんでした。

また、中学生ですけども、これはママに対して、「ママ、私を生んでくれてありがとう」と言ったというんですよ。だから、そういう受けとめをしてもらったというのが、とても…。

井深 そこを強調するとね、今どきの親殺しなんていうことと全く相対するね。これ、もっと何

かちょっと広める工夫ないですかね。

要請があれば、全国的に公演して回られるということも…？

稲垣 ええ。もちろんそれはそうしたいと思います。

井深 それにしても、今まで誰もやったことのない、胎児のミュージカルするには、一生懸命勉強したと思うんだけど、その辺を少し…。

稲垣 そうですね、もちろん1番最初は、何といっても脚本なんですね。ですから、3年のほとんどは本づくりでございました。去年の暮れから今年のお正月、1月、2月にかけては、私共が毎日毎日作家の先生にお電話をしたりとか、お宅へ伺って、お話をしたり、それから、何枚かずつ書いたのをいただいて、それで読んで、もう1回戻して書き直していただいてというようなことをやりながら、2月に脱稿しましたね。

本ができますとね、次に音楽をつくるんです。寺島尚彦先生の作曲が2ヵ月以上かかりました。詩がございませぬ、その詩も、歌にぴったり当てはまる詩でない時には、作家の方とまた相談をしたりとかということもあって…。

井深 それだけかかった本をね、あとずっとやらないというのは、もったいないね。

稲垣 全部で曲は30曲。細かいのを入れたら、40近く、曲数としてはあるんですけども、それをみんなオーケストレーションをしたり。そうやって音楽ができますと、今度はダンスができるわけなんです。このダンスもまた、それぞれみんなばらばらの踊りがありますでしょう。

その3つができて初めて、今度はお芝居をしながら、そこに歌もダンスも入れてお芝居をつなげていくわけですね。お稽古は3月の中旬から始まって、3ヵ月しっかりかかったのね。

それと今回とっても大変だったのは装置なんですね。と言いますのは、場面転換が大変多い。今のお客様は長い間ずっと見ているということには耐えられませんか、短い時間でパッパッと切って、しかも内容の濃いものをぼんぼんぶつけてテンポを早くしていかないと、とても追いつかないというので、そういう展開の早いものになったんです。それを早くパッパッとやっていくのには一体どういう装置がいいかというのが大変だったんですね。

というのは、結局、裏方さんが出ずに、役者が全部転換をしていかないと間に合わないわけです。そういう装置だったものですから、袖から舞台が見えないんです。普通は、舞台の袖の所から、みんな舞台の進行状態を見ながらやっていくのですけれども、舞台が全然見えないんですよ。ほんとにね、気配で感じるしかない。ですから、それで、全員稽古をして、ここでこういうきっかけというのを頭に全員がたたみ込んで、音と気配でやっていったんです。

暗転が多かったでしょう。真っ暗な間にばーっとみんなが替えなければならないから、これがもうえらい騒ぎだったです。稽古場にパネルをいっぱいつくって、お稽古をしながら、それを動かすお稽古もする。出入りがみんな決まって、上手に逃げる人、奥へ逃げる

人ときっちり決めておく。妊婦さん役の人なんか、お腹が出ていますでしょう。ぶつかっちゃってね、その段取りだけでも、えらい騒ぎなんです。

それから、春夏秋と3つシーズンが変わったわけです。それを着替えるわけですね。一応お腹もシーズンごとにふくらましていくわけです。フィナーレでは全然なくなって、それからカーテンコールでまたつけるとかね。もうその辺の早変わりも大変で。

井深 ああ、そうね、カーテンコールの時は、お腹を大きくしてたね。

稲垣 ええ。それも何秒、秒単位なんです。何秒でできますか、できません。じゃ、すみません、寺島先生、ここの音楽はもうちょっと長くしてくださいと、こういう、つまりお互いにそれがあるわけです。

井深 風船ではいかないですかね（笑い）

稲垣 ふくらませばというわけにいかなくて、あれはやっぱり全部綿でつくるんです。

井深 あれ、風船だと曲線が違うんですね。

稲垣 違うんですよ。自分の体にくっつけて、綿なんかつめ過ぎたら、そこを間引いていったりして。だから、あせもですよ、みんなね。それから胎児軍団というのはぬいぐるみ着ましたでしょう。みんな綿をまいているんですね。結局、まあ一るところに短い手足がついているという可愛い感じが胎児ですからね。この丸みをつけるのをどうしたらいいかというので、あの胎児をつくるのに苦労しましたよね。へその緒は生まれたら取れなければならない。だから、へその緒は取り外し自在になっているわけね。これが意外と重たいから落ちるんですよ。あのへその緒がね。

井深 大変だ。

稲垣 取れちゃったら、胎児の命にかかわるわけですからね（笑い）

宇宙からの光に似て・・・

井深 今度入れてほしいのは、お父さんがどこから帰ってきてね、お母さんのお腹に向かって、子供の名前を決めてね。その名前を呼ぶ、それをひとつ入れてくださいよね。

稲垣 そうなんですよ。夫婦が、ちょっと1組ぐらいしか出ていませんでしたからね。パパの存在をもう少し入れましょうね。一幕がちょっと不満なんです、私共、つくってしましてもね。もう少し何か、一幕でその辺のところがうまく皆さんに分かっていただけるようにしたいなというふうに、松木先生に既にお願ひしてあります。もうそれが始まっているんです。

井深 ああ、そうですか。

稲垣 ええ。音楽のほうも長いところがあったりするものですから、いろいろ手直しをして、また再演の時にはよりよくしようというふうに今思っておりますけれども。

やっぱりそうやって2回か3回直しますとね、とってもしいものができるんです。1回だけじゃやっぱりだめなんですよ。お客様との交流の中から舞台ってできていくも

のですから……。

井深 0歳児、胎児に関する勉強はどういうふうにしたんですか。

稲垣 それはですね、私共、杉山四郎先生という産婦人科の先生が監修をしてくださって、その先生は私共の稽古場から歩いて10分ぐらいの所にいらっしゃる。

そこに何度も何度もお邪魔しましてね。医師役軍団で伺いまして、研修と言いますか、白衣をみんな着ましてね、診察室へ私共入れていただいたんですの。

超音波で赤ちゃんの発育のぐあいを見るという所に行きました時に、臨月間近の方がいらして、最初に写ったのは心臓だったの。大きいんですね、画面で見ますとね。ドキンドキンという、これ心臓だと言われて、すごく感動しちゃったんですがね。次にね、手と足が丸まって入っていますでしょう。手足の指が見えるの。ママが、自分で診察していただきながら見えるわけです。

お隣にもう一人、その方はお腹がべちゃんこなの。だから、あら、この方ほんとに妊娠していらっしゃるかどうかを調べるのかなぐらいに思っていましたの。そして、機械を当てましたらね、画面は真っ黒なだけなんです。ただ、時々その中にピカッピカッと光るものがある。「これが心臓です」と。でもね、心臓とはとても思えない。光としか見えないんです。それも不規則に。ピカッ、ピカッという、ほんとに光っているという感じなの。SFの映画で、宇宙の果ての暗い所から生命体がピーッとよく光って飛んでくるという、ドラマがありますでしょう。そういう感じがして、すごいなと思ったんですよ。

卵子と精子が受精して、受精卵になりますね。そして5週間ぐらいたって初めて子宮に着床する。着床して1週間ぐらいで臓器としては初めての心臓の薄い膜ができるんだそうですけれどもね、粟粒ぐらいの。そこから発するあの光はね、私はもう忘れられない。

台詞の中で「僕、きのうやっと心臓の薄い膜が1枚できたところなんだ」というのをね、書いてもらって……。

井深 ああ、そうですか。

稲垣 その不規則なきらめきがね、日本流に言えば十月十日でどんどん大きくなって行って、それからの長い長い一生を、ずっと動いているんだと思ったら、ほんとにすごいなと思ってね。そしたらね、医師役の大塚國夫さんがそれを見て、ちょっと失神しちゃったんですよ、女性の私でさえ、ものすごいショックでしたからね。あれ男の方が見たらね、命の根源というか、神秘というかね、否応なしに、それを感じますよ。

そして井深先生から伺った、お腹の中での十月十日というのは、10億年ですか、結局人類の歴史、進化と一緒になんだというのが、私が今回この作品をやって、何にもまして一番すごいなと思ったことですね。

生命の重み

稲垣 あと、私ね、きのうかおととい生まれた赤ちゃんを抱かせていただいたんですが、怖かつ

たですね。普通物には重さというのがあって、何と言うんでしょう、外枠のものがあって、重さがある。重さってそういうものですね。それがね、違うんですよ。全然、今まで持ったこともない重さなんです。これも私はすごいショックだったの。何なんだろう。要するに綿でもないんだけど、ホワツとしていて、ちゃんと重みがある。「もう幾つ」とかいふ大きさになると、赤ちゃんも抱っこされて、ふっと自分の中で自意識というか、緊張しますね。ところが生まれて2、3日の赤ちゃんには全くその緊張がないというか、すべてゆだねて何の警戒心もない、もうほんと生まれたままというのは、このことだと思いました。警戒心がなくて、ふっとすべてをゆだねる重みというのはね、実際には、軽いんですよ。だけど、何とも言えない。2000グラムとか3000とか、そういうんじゃないんです。あの経験はね、最高。もう最高。

井深 『胎児に対する親の責任について』って、見終わったら、やっぱりあの題以外はないねと言った人があるけど。ほんとにびっくりしましたね、最初は。何てすごい題かと。

それぞれ演じた人も、随分不思議なお芝居にぶつかっちゃったものだな、と自然に勉強したでしょうね。

稲垣 そうですね。妊婦になる人は妊産婦教室に通いましたし…。

教室へ通っているんなお話を聞いて、だんだん大きくなっていく時にどういう感じになるのか。それから、だんだんと顔つきも変わってきますよね。うちの役者たちは、みんな20歳代のミスですから、結婚したことももちろんないし、分かるはずのない人たちがだんだん妊婦の顔になってきたんです。まあお芝居というのはそういうことで、みんなその人間に肉体をもって変身するわけですから、いろいろ勉強していくうちにそういうふうになってしまうということなんですけどね。

『胎児に対する親の責任について』の中に、出産のシーンがありましたでしょう。あの時最初に言う台詞、「赤ちゃんは自分で生まれる日を決めて、ホルモンを出しながらママにゴーサインを送ります」というのを、私はうんとしっかり言ったんです。

井深 これはお医者さんでもちょっと知らない台詞だね。

稲垣 そうですか。でも、あれは絶対言いたいんですよ。だって、今ね、日曜日の出産少ないそうです。ほとんどないぐらいなんですって。

とにかくあそこの出産シーンで、私、あの台詞はしっかり伝えたかったの。

井深 あれだったら高校生も照れずに見られるという感じだな。

稲垣 音楽にしても、今まで、胎児にロックは絶対いけないと言っていたのが、それほどでもないとか、何かそういうふうになるところもありますから、再演の時には、その辺もちゃんと調べながらしないといけないと思います。

井深 お母さんの受けとめ方もあるんですよ。お母さんが新日本フィルのピオラを弾いておられる人が妊娠しましてね。その赤ちゃんは、お腹の中で現代音楽やロックだと、ビクとも動かないんです。それでね、メンデルスゾーンやビバルディだと、ものすごく気持ちよく動くんですって。もう1つほかの意見では、好きなやつは動かないで、嫌いなのは動く。

足で蹴飛ばすんだと。好き嫌い、どっちにもロックは入っていましたね。

それから、詩には感動するんですね、赤ちゃんね。あれ、リズムに感動するんでしょうね。

稲垣 『胎児に対する親の責任について』という作品は私共にとってほんとに12年間の集大成です。何とか1人でも多く見ていただきたいと、とにかく思っているものですから、ぜひお力をお願いいたします。

おわり